

氏 名	徐慧 (ソーヘー)
学 位 の 種 類	博士 (造形)
学 位 記 番 号	博第 24 号
学 位 授 与 日	平成 29 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論 文 題 目	節制によってつくられたかたちの美
審 査 委 員	主査 武蔵野美術大学 教授 新島 実 副査 武蔵野美術大学 教授 赤塚 祐二 副査 武蔵野美術大学 教授 朴 亨國 副査 武蔵野美術大学 教授 古堅 真彦

内 容 の 要 旨

本研究の契機は「人の手によって作られる形に、なぜ人々は美という共感を得るのか」である。研究目的は、この造形の根源的な疑問について、作る人の「心」と「形」の関係に基づいて解き明かすことである。「心」と「形」の関係は、心を動かす原因である「欲」と「節制」の概念を、東洋哲学と東洋美学に基づいて考察することで明らかにする。そして、才能のある天才的芸術家が自由な環境で作り出す形ではなく、制約的環境で長期間同じ形だけを作り出す平凡な工芸家に注目するため、柳宗悦の「無事之美」を中心に論じる。人の手によって作られた形には「ゆがみ」という痕跡が残るし、完全な形を作り出す機械とは異なる。筆者は、制約的環境で「ゆがまないように、欠点がないように」して無意識的なゆがみこそが「無事之美」を現すと考える。本論では、無心の無意識によって生じる形の「ゆがみ」に着目し、柳の「無事之美」と、現代職人の造形美学、そして自らの身体性と心に基づくドローイングによって「心」と「形」の関係を解き明かす。

身体による造形の非対称・不均衡・不規則・ズレなどの「ゆがみ」の形は、身体リズムとも言える。バウハウスのヨハネス・イッテンは、身体リズムには描いた人の固有な息遣いや習慣などが現す不思議なものであると述べた。筆者は、同じ形を反復的に描く制約的環境であれば、そのゆがみを通じて個人の傾向が測定できると考えた。そして、被験者の実証研究及びゆがみを客観的な数値に変換するプログラムの開発で、身体リズム測定を試みた。

本研究は 2 部で構成されている。

第 1 部は、柳宗悦の「無事之美」を中心に、東洋哲学と東洋美学における形と心の関係性を考察する。東洋哲学では、儒教と道教の中心概念である「仁」と「道」を挙げる。「仁」は他人に対する思いやりを持つこと、「道」は無為自然の本性に戻り自由になることを重

視し、混乱のない平和な社会のための共通の目的を志向し、禁欲を主張したが、新儒教の朱子は、人間の欲を節制する修行方法を提示した。その後王夫之と戴震は、人間が欲を持つことは同然であるという人欲肯定論を主張した。東洋美学では、中国美術史上最初に絵画において精神性を強調した顧愷之の「伝神写照」を始め、謝赫の「画の六法」の最上段階の「気韻生動」、禅宗思想の影響で形成された六組慧能時代の文人画と、呉道玄の「山水の變」を挙げるなど、絵画における精神性を強調する。本論ではそのことを基に形と心について論じる。柳は、仏教美学である「無事之美」で伊戸茶碗と楽茶碗を挙げながら、無心で働く職人は、美を求めなくても自然に美が現れると述べた。即ち柳は、美醜を区別せず、伝統を守るという他力が働く心を持つ職人が「無事之美」を現すと主張した。本論では柳の仏教美学、職人たちのインタビューを通じて、職人の造形美学について論じる。

第2部は、筆者が約4年間、直線を繰り返して描く行為によって、形と心について考察する。直線を反復して描く行為は、欲を節制する修行の一種でもあり、自力の「無事之美」の試みとも言える。人間の手で完全な形の線を描くことを求める制約的環境を設定し、欲の有無によって変化する形について論じる。1章は、筆者の欲を引き起こす要因を挙げ、欲を気づくまでの過程と節制など、心と行為について考察する。2章は、10名の被験者の実証研究を通じて、個人のゆがみの数値を測定するプログラムでゆがみの傾向把握を試みることで、今まで予測不可能であった身体リズムの把握するための最も基礎的な研究を提示する。

審 査 結 果 の 要 旨

研究の構成

本研究の目的は、「人の手によって作られる形に、なぜ人は美という共感を得るのか」といった、造形における根源的な問いかけを源にしている。この疑問に対峙すべく徐慧（ソーヘー）は、人間の身体リズムから生ずる線や形の「ゆがみ」が生み出す造形空間に着目し、そこで生成される線や形の「かすれ」「ずれ」「ぼけあし」などが美を成立させる要因となるのではないかと推論を得、直線を反復して左から右に描く行為によって、この間と向かい始めた。4年間に渡って記述され記録された作品は、研究の一次資料として論文の第2部で詳しく論じられている。この修士在学中から行ってきた、造形表現とも身体運動とも言える境の無い身体行為の継続を通して徐慧は、やがて柳宗悦の「無事之美」の概念を知ることになる。そしてこの研究の理論的背景の根拠に「無事之美」を位置づけ、さらにこの概念のより深い理解のために東洋美学への考察へと向かい、『東洋美学における節制—柳宗悦の「無事之美」を中心に』と題した論文にまとめ上げている。

学位申請の為に提出された著作物は、論文「節制によってつくられたかたちの美」と「スタディ」と自ら称す、左から右へ線を引いて制作された膨大な作品群をA4版冊子にまとめた作品紹介「ポートフォリオ」の2点である。

研究の概要と特徴

「人の手によって作られる形に、なぜ人は美という共感を得るのか」といった、造形における根源的な疑問を解き明かそうとした意欲的な研究である。徐慧は、人間の身体リズムによって生ずる線や形の「ゆがみ」に着目し、この問題と向き合った。修士在学時代よりはじめた B3 大の画用紙を横使いし、ひたすら完璧な一本の線を引くことに集中する行為は、いわゆる作品制作とは異なる造形行為と言える。一本の完全な線を完璧に描こうとしても描けないもどかしさから生じる線の形状や線の集積が浮かび上がらせる「ゆがみ」の造形は、やがて微細な空間の変化に反応する視感覚を徐慧のうちに生じさせる。徐慧はこの造形行為における自らの身体と精神のあり方を、4 年間に渡って記述し残しているが、この膨大な「スタディ」による作品によってこの研究は特徴付けられている。またこの、「ゆがみ」の発見のプロセスにおいて徐慧は、かなり強い心理的・造形的制約を課している。それは「一本の完全な線を求める為に、ただ左から右に線を引く」ことだけを目的にするという制約である。この自ら設定した制約を課す造形行為を「節制」という言葉に置き換えて制作を展開させている。美しい線を描くとか躍動感の有る線を表現するといった表現欲求に基づかない線の引き方である。そしてこの線を引く造形行為を、柳宗悦の「無事的美」という他力思想の概念に結びつけ理論面での研究の根拠として展開させてゆく。

予備論文で指摘のあったバウムガルテンの美の概念とコーリングウッドとジョン・ラスキンが論じた芸術と工芸の概念についての稿を、「単なる工芸論として組み立てられているに過ぎず、もっとテーマ寄りに書かれるべきではないか」との指摘を踏まえ西洋の工芸概念の考察から、東洋美学の考察へとその論の展開を変更した。その中でも柳宗悦の仏教美学への傾倒によって徐慧自身の線を引く造形行為に変化が現れる。この 4 年の間に制作された徐慧の作品、その一点一点から見えてくる精神力には驚かされるのだが、さらにそこに「欲」という言葉が頻繁に使われ出す。それは相当に鍛えられた視感覚によって読み取ることの出来る、作為と無作為の差によって生じる「ゆがみ」の形を指摘する言葉である。この言動は徐慧の造形行為をさらに変化させ、より大型の一本の線を引く限界までのサイズへと造形空間は変容させられてゆく。理論的根拠として設定した「無事的美」は徐慧の造形行為の指針となり、この研究の独自性を生み出している。ただ徐慧の現在の「スタディ」は「無事的美」への自力からの挑戦であり、柳宗悦が理想とする「不二の美」へ今後どのように成されてゆくのか注意深く見守りたい。

最終試験

2017 年 1 月 20 日の公聴会の後、最終試験を行った。既に提出されていた論文と作品については審査員全員が概ね博士論文としての内容を十分備えているとの認識の上に立って行われた。口頭試問においては論文上に使用されている言葉の定義についての論者の考えの確認を行った。また審査員より改善を求められた文言については最終論文にて訂正する旨の確認を得た。

審査の概要

最終試問の後、可否の審査を行った。まず論文、作品に対して各審査員より専門的見地からの概要を伺った。

第1部の東洋美学における節制—柳宗悦の「無事の美」を中心に—は、東洋哲学における二大軸である儒教の「仁」と道家の「道」を用いて東洋哲学における形と心を考察し、各時代における両者の関係性を明らかにしている。また、儒教の「仁」と道家の「道」の影響を受けて発展していく東洋美学における形と心との関係性について、顧愷之の「伝神写照」や謝赫の「画の六法」、禅宗画と山水画にまで考察している。これらの東洋哲学と東洋美学の流れの最後に東洋哲学、特に仏教思想に深く関わっている柳宗悦の「無事の美」を詳しく考察し、心を動かす原因である「欲」を節制する修行によって無心が生じ、無心で無意識に制作を行うことによりいわゆる「無事の美」が造形に現れることを論証している。従来の個別の作品や哲学者・作家の言葉を断片的に引用する研究に留まっていなかった点、十分な文献や資料に基づいてアジアにおける全貌を掴もうとする点、第二部の自作との関係性が有機的である点など、極めて高い評価に値する内容で構成されている。

一本の長い線をフリーハンドで、隣り合わせて何本も描くことで、その中に身体のリズムを感じられる作品を作っている。それを繰り返すうちに、自分だけではなく、そのリズムの「一般性」を探求するようになり、線のリズムの定量化ができないかと考えるようになった。そこで徐慧は描かれた線を一旦コンピュータに取り込み、それを解析するアプリケーションソフトウェアを作成して、リズムの定量化を行なった。

「身体のリズム」や「フリーハンド」で描かれた作品を「定量化」という試みはとても興味深く、また実際にいろいろな傾向が算出された。徐慧はその結果を持って、再び、自身の作品にそれらを還元している。

第2部については、端的に研究制作の側面が語られている点を評価するが、論考をスムーズに進めようとするあまり、節制あるいは修行といった語句が少し安易に語られている傾向があった。自身の作品制作へのさらなる丁寧な読み取りが必要であり、そのための時間が必要ではないかと思う。そうすることで徐慧さん自身の節制の美としての言葉も生まれてくるのではないか。

自らの身体性から生成された造形を、いわゆる作品としてのみ位置づけるのではなく、研究の為の一次資料として提示しながら、この困難な問題に対峙した徐慧の研究は大変に興味深く意義あるものだと言える。柳宗悦の仏教美学はデザインの根本命題とも一致しており今後の展開が楽しい研究である。

審査結果

論文、作品に対する各審査委員の概要を伺った後、審査に入った。

人のものづくりの根本に迫る壮大な内容について、自ら切り口を作り、実際に確認しながら論考しようとする徐慧の試みに賛同し、高く評価したい。論文を読んだ印象として、

内容も文章も予備論文よりさらにその質が上がり、読みやすく適切で妥当性ある表現に改善されていると感じた。

約4年間直線を反復して描く行為を通じて感性的に体得した徐慧独自の概念を用いながら、欲とその欲を節制する修行を用いて自身の制作を分析した点は高く評価できるものである。アジア全体を視野に入れての歴史背景に目を向け、自身の制作理念の根源を、西洋ではなく、東洋哲学と東洋美学に求めたことは高く評価できる。今後も広い視野に立って、先入観にとらわれず、今まで通り高い研究意欲と緻密な研究を進めるなら、徐慧の研究は関連学問においても多く影響を与えるようになると思われる。

この博士論文はアート作品の中に埋め込まれた「感性」による描画手法をコンピュータや数学を活用して解析している点がとても興味深い。今回は「一般性」をベースに解析しているが、この解析手法を作家自身の身体のリズムに対して特化させることで、さらに徐慧の作品に深みが増すのではないだろうか考える。

これまで西欧的な造形思想によって語られてきた形と心の関係を東洋美学に基づいて行った研究は独自性に富み博士の学位に十分相当すると考える。

上記委員の意見については、審査委員会全員で共有した。以上の各委員の発言の後、審査委員一同は、本研究が武蔵野美術大学の博士（造形）の学位を授与するにふさわしいと判断した。



「節制の線」 2015 年、韓紙、鉛筆、130x130cm
(シェル美術賞 2015 入選作品)



「節制の線 2707」 2015 年、板、和紙、鉛筆、94x87cm
(第 29 回 全国絵画公募展 IZUBI 入選作品)



「節制の線 2712」 2015 年、韓紙、鉛筆、130x162cm
(第 34 回 上野森美術館大賞展 入選作品)